

24-53

特18  
825

No 1691

48  
18

明治廿年六月三十日  
陰曆五月十日  
發

# 換展誌

第壹號

禁賣買  
相續會

本館印

017572-001-0

特18-825

換展誌 第1, 4号

神保 達元 / 著

M20, 21

ABF-0358





# 緒言

此小冊は會員より報告せることを纂輯して會員一同頒布せんために上梓せしものにして世上に公布するものにあらず故に可成的行文を平易にして脩飾を用ひざりて報告者の思想を詳かに他の會員に傳へんと欲す就ては會員諸君の了知せる如く本會の目的は集合体の徳義を顯登し護國扶宗の運動を爲さんと欲することなれば其集合体の元素なる一箇人に護國扶宗の小運動なかるべからず夫の紡績製茶養蠶製紙手細工等の職業上の進歩は國家の利益を與ふることにしてとりも直きぞ吾人乃相續行の一部分なれば會員諸君の實地より着手せることは務て報知したまわんとやを希ねかふなり

# 目録

- 御直諭 五月三日御法會御滿會ノ節
  - 蓮如上人 いろは歌
  - 御法會ノ所感 顯道學舎
  - 堂宇ノ改良ヲ促ス
  - 雜報 三十三件
- 寄書
- 顯道學校ノ有志ニ示ス 松浦僧梁
  - 本宗有志ノ信徒ニ寄ス 馬遊生
  - 相續會設置ノ鳴謝 鳥取共和會員
  - 行進歌 塞士古城

編者 謹ス

當誌發兌第一号ハ月後ノ日迫リ再讀ノ餘暇ヲ得ス寄書モ到達ノ儘ヲ印刷ニ附シ文章ノ不体裁誤字失策等モ量リ難シ看客諸氏ノ諒察ヲ乞フ

## 相續會換展誌第一號

●五月三日御法會の翌日當り恭詣乃道俗へ

大法主殿より御直諭の筆記を得たり而て文字誤謬此恐れあれども正に鴻おらさるる見る人其旨趣を奉戴あれかしと謹て茲に載す

こたひ前住上人十七年の法會を豫脩せしところ遠近の門葉わをもくと恭榮しはるるの在世化導の洪恩をかもひ報謝の懇念をはこぼし昨日の魔事なく満座に及び歡ひあふり過すなりなから今度法會に値遇務し人々たゞ名聞人なみれ心中よて空しく歸國せらる候ては千萬くなげかしく候柳前住上人在世のむかし四十餘年間斷なく化導し給ひ特ふ臨末の遺訓もたゞわが真宗一諦の教義をきつくしく守るべき旨を懇み示し給へりまかれの門葉中この遺訓の趣を各自躬行實踐せらる候ては前住の素意も相かなひ申へく候るれみつき當流相承の安心と申は一七日之間改悔出言せらるし如く諸の難行難修自力の心をふりすて一心に彌陀に歸命し奉り祈願請求のねもひはこはず大悲れ勅命に信順し偏に佛智の不思議をわ

きて往生を願方かまかせ奉る計なりこの一念のうちに往生一定の身とあや候へりうのうきしさのあやりの恒時と稱名を相續し廣大の佛恩を念報せらるべく候るを念佛の行者たらむ身の何事も佛陀の冥覽をへりみ言行忠信の金言を堅く相守と徳義を重し和合を本とし世間途の義も順し殊に國家を爲すの各々身心を尽し前住の遺訓に示し給ふ如く現生に皇國の忠良となり來世は西方の往生をぞ候身せなされ候やう深く希候實に無常迅速乃世の習なれりなさては年忌法會に値遇せんこと自他共に期しかたう候得り一日も片時も油断なく相承の正意を決得し法義は上より美敷世をこそされ候事肝要な候也

●このいすは歌の宗教新聞に掲げありと見漏しぬる人もありなるといひまた出しぬ

此四十七首の文明の末赤尾道宗すゝ先申けるふよと遺如上人よませたまふとん越前の國吉崎法雲寺に御眞筆あり

いくたひも聞にありぬは法の道



緒言

此小冊は會員より報告せることを纂輯して會員一同頒布せんために上梓せしものにして世上に公布するものにあらず故に可成的行文を平易にして脩飾を用ひざりて報告者の思想を詳し他の會員に傳へんと欲す就ては會員諸君の了解せし如く本會の目的は集合体の徳義を顯發し護國扶宗の運動を爲さんと欲すことなれば其集合体の元素なる一箇人に護國扶宗の小運動なかるべからず夫の紡績製茶養蠶製紙手細工等の職業上の進歩は國家利益と與ふることにしてとりも直きと吾人乃相續行の一部分なれば會員諸君の實地着手せることは務て報知せんと欲し之を希ねばならぬ

目録

五月三日御法會御報告ノ目録
○御直諭 五月三日御法會御報告ノ目録
○遠如上人 いろは歌
○御法會ノ所感 願道學會
○堂宇ノ改良ヲ促ス 三十三件
○雜報
○願道學校ノ有志ヲ示ス 松浦僧榮
○本宗有志ノ信徒ニ寄ル 再遊生
○相續會設置ノ鳴謝 鳥取共和會員
○行進歌 正信偉大意 寒士古城
○看客諸氏ノ諒察ヲ乞フ

相續會換展誌第一號

●五月三日御法會の翌日當り恭詣り道俗へ

大法主殿より御直諭の筆記を得たり而きて文字誤謬を恐れあれども正に清あらしむる人其旨趣を奉戴あれかしと謹て茲に載せ

こたひ前任上人十七年の法會を豫脩せしところ遠近の門葉ををもくと恭築しはるのみ在世化導の洪恩とおもひ感謝の懇念をはこはき昨日の魔事なく満座に及び歡ひおぼえ過ぎさりながら今度法會に値遇せし人々たゞ名聞人なれば心中よて空しく歸國せらる候てり千万くなけかし候柳前任上人在世のむかし四十餘年間斷なく化導し給ひ特にお臨末の遺訓もまたわが眞宗二諦の教義をうつしく守るべき旨を懇み示し給へりまかれり門葉中この遺訓の趣を各自躬行實踐せらる候てこそ前任の素意も相かなひ申へ候れらるべき當流相承の安心と申は一七日の間改悔出言せらるし如く諸の難行難修自力の心をふりすてし心小彌陀お歸命し奉り祈願請求のたもひはこはす大悲れ勅命お信願し偏小佛智の不思議をい

きて往生を願力あまかせ奉る計なりこの一念のうちに往生一定の身とあて候へりうのうきしとのあやりの恒時と稱名を相續し廣大の佛恩を念報せらるべく候ふと念佛の行者たらむ身の何事も佛陀の冥覽をのへりみ言行忠信の金言を堅く相守と徳義を重し和合を本とし世間途途の義順し殊に國家を爲すの各々身心を尽し前任の遺訓に示し給ふ如く現生にこそ皇國の忠良となり來世は西方の往生をわけ候身をなされ候やう深く希候實無常迅速乃世の習なれりなされては年忌法會に値遇せんこと自他共に期しかた候得り一日も片時も油断なく相承の正意を決得し法義は上より美敷世をこそされ候事肝要候也
●このいろは歌は宗教新聞に掲げありしと見漏しぬ人もありなるといひまた出しぬ
此四十七首の文明の末赤尾道宗すを申けるよと遠如上人よませたまふとん越前の國吉崎法雲寺に御眞筆あり
いくたひも聞にありぬは法の道



ぞむれいつるまんしむる色  
ろく道にひく業障れつゝを切る

銀なりけりみたれ名號  
はひかしことばであやまる法の道

ふと迷ふへき人うはりまし  
にせものりはり安きにあらぬ

誠け信れざるしなごけり  
海のくご心ふるかふ稱名の

ほかとりあかき信心もなし  
へさせに佛の恩をむねみえて

外にまつへき來迎もなし  
とふふきは恨くやみの雲はきて

むねにのこるまにしむの月  
ちしきとり迷ひのやみの手をひかれ

今のうやく花にこうすめ  
りこんある人とうらやむ心こそ

彌陀のちのひをまらぬゆへなり  
ぬれてほそたをどのりの涙にて

佛は思をしる人うまふ

るくんじてまたあひのたさみけりなり  
おろろのよき人うかなまき

をいぬきの心かたをよわりゆく  
後生に願もどくさうちなり

以下次号

●御法會ノ所感 顯道學會

本年四月廿六日ヨリ五月二日マテ前宗主十七回ノ法會開  
勤ニ執行アリ諸國ヨリ參詣人ハ意外ニ多カリシハ本年季  
候ノ後レヨリ農家ニ閑暇ナル故カ昨年ノ豐熟ニ由ルカ將  
ク閑暇ト豐熟ニ拘ハラス親シク眞影ヲ拜シ奉ラント欲ス  
ル丹誠ノ致ス所カ又見物ノ爲カ其故ヲ知ラレテ參詣ノ  
男女老若ハ廣キ境内ニモ溢レ見ル人驚カサルナキノ景狀  
ナリ此際旅宿人ヲ屈出タル者殆ト二萬人ノ多キニ及ヒテ  
リト嗚呼此ノ如キ參詣ノ多キヲ以テ吾宗ノ盛ナリト爲ス  
カ皆信徒ナリト爲スカ余輩ハ其否ヲサルヲ信スルナリ既  
ニ中祖大師ノ訓誡アリ余輩嘗テ人ノ多キヲ見テハ其訓誡

ナ追想セサルハナシ夫レ幽谷ヲ出テ喬木ニ遷ルハ順ナリ  
喬木ヲ降テ幽谷ニ入ルハ逆ナリ然ルニ方今人智日々ニ進  
ミ野蠻ハ半開トナリ半開ハ全開トナル是幽谷ヨリ出テ喬  
木ニ遷ルモノナリ佛敎ハ之ニ反シ喬木ヲ降リ幽谷ニ入ル  
者多シ如何トナレハ吾人耳ニ無上ノ法ヲ聞キ口ニ自信歌  
人信ノ道理ヲ語ルモ自愛々他ノ本分ヲ尽シテ之ヲ實行セ  
ス故ニ佛敎ハ衰頽シ外敎ノ侵入ヲ見ル是他ナシ多ク集ル  
ヲ繁昌トシ參詣スルヲ信徒ナリ皮相ノ虛飾ヲ佛敎ノ名望  
トスルカ故ナリ依テ感慨ノ餘リ此言ヲ以テ吾同胞ニ望ム  
希クハ各自ニ行不行ヲ觀信不信ヲ念ヒ將來時勢變遷ノ如  
何ヲ思維シ國ノ事情ト佛敎ノ盛衰トイカナル結果ヲ來ス  
ヤ遠慮アラソコナ

●堂宇ノ改築ヲ促ス

衣食住ノ三ツハ人間社會ニ於テ一日モ闕ク能ハサルハ勿  
論ナリト雖モ人ニ貴賤貧富ト事ノ便利トニ依テ住宅ニ廣  
狹アリ衣食ニ美惡アルハ言テ俟テザルナリ往昔巢窟ヲ以  
テ住家トシ木食草衣ナリシモ人智ノ發達ニ從ヒ竹木ヲモ

テ家屋ヲ作り漸々ニ善美ヲ加ヘ葺梁彫柱ヲ用ユルニ至ル  
衣食モ亦此ノ如クナルハ喋々述ルニ足ラザルナリ試ニ見  
ニ近時都會ノ地ニ家屋ノ改築セルヲ維新已前ニ比スレハ  
別世界ノ如シ洋服ノ名アリト雖モ既ニ皇國ノ禮服トナレ  
ハ決シテ夷狄ノ服ト言フ可カラズ練化ノ家屋モ亦然リ若  
ク習慣ニ泥ムトキハ幾世ヲ經ルトモ改良スルコトアル可カラ  
ズ故ニ衣食住共今ニシテ改良セズンバ交際ニ不便ニシテ  
禮讓ヲ失シ職業ニ損害アルハ親ク目撃スル所ナリ曩ニ僧  
侶ノ改服論ハ新聞上ニ掲載アリシガ果シテ我が宗ニ於テ  
先ツ之ヲ行フヲ見ル他ノ學生モ亦洋服ヲ纏ヘルニ至ルト  
雖モ家屋ノ建築ナクンバ弊害頗ル多シ既ニ明治八年ニ當  
リ特別ナル殿堂ニハ政府ヨリ靴足ニテ昇ルヲ禁セラレタ  
レト其他ハ禁令ナシ而シテ教場ハ従前ノ製ナレバトヒ  
靴ヲ脱シテ昇ルモ其置所ナク或ハ數珠草履ヲ合セ提ケ佛  
前ニ進ミ或ハ木履ノ土砂ヲ座上ニ散ラ無禮ハ言テ俟テズ  
罷進モ衣裳モトモニ泥汚ニ染ム若シ然ラザレバ忽チ紛失  
ノ患ヒアリ實ニ演劇場ニモ及ハズシテ宛モ犬家ノ戲場ノ  
如シ京師尙然リ況ンヤ邊鄙村落ノ堂宇ニ於テチヤ然レバ



然レバ教場本堂ノ改良一日モ忽カセニスベカラズ若シ客  
易ク新築ニ及ビ難キ向キハ遷延ヲ去リ倚子ヲ設ケハ威儀  
自ラ正シカル可シ威儀正シケレバ隨テ靜肅ナリ心魂爽潔  
ナレバ教訓モ正シシ領承シ法門ヲ利益ヲ顯スノ好結果ヲ  
得ニ至ルベシ然ルモ説者聽者トモニ功勳ヲ奏スル兩全ノ  
急務ナルベシ

○ 雜 報

●五月十五日の例年の夏の始つて本利に於て勤行式あり  
役係とも出堂ありて 御親論おらせられたり  
●廿一日の祖師御降誕祝式例の如し役員は奉事科へ恭  
賀あり其日大教校は法主殿臨校ありて安居の舉行あり  
又十七日にも臨校にく生徒乃受業等親しく觀覽おらせら  
れたり 又廿五日には普通教授へも臨校ありたり  
●長崎勝山町西村正平氏の獨立して夜學校を開設せり宗  
教の補翼とせんとの意思と最初ハ月謝ハ薄きはなして入  
校するもれありしか當今ノ至りてハ校内狭く入學を絶ま

ととも學業は兎も角も教會のみに入ふべきを望む人多く  
頗る盛大を極め既ハ文部大臣の兩度まで臨校ありしと  
●長州馬關へ今回砲臺設築お就ては本會の三吉周京氏の  
所有地最上位を占めたる山林十三町歩御用地よか、又當  
今海軍費金献納許可ある際なれハ幸ハ右山林を献納せら  
せよとの由 ●廣嶋福屋敷明教寺ハ宗教の振とさる  
を歎し全所の關教部會目の發起して本堂は疊々廢去腰掛  
を掘へ説教の節男女を別らしより老嫗は子守りを兼  
ね恭詣せし風俗と一變し學校生徒を始め其他壯年輩又中  
人以上の恭聽者多く大に宗教の勢力を増殖したと  
●廣嶋在に設けある進徳教校へハ本春千田知事書記官岡  
名及び鎮臺醫院長中學校々長等臨校ありて授業監督お  
り了て演説を開カレ各自ニ身命限リ眞宗維持ハ心を尽す  
へとの誓言と以て我宗教を賞美せらるると云ふ  
●又博愛社と云眞宗の權素相圖り慈善病院と設立し社長  
と千田知事院長ハ鎮臺醫院長として幹事の進徳校幹事之  
を兼ね宗教も確乎不拔ハ勢と現出し慈眉を開くハ好結果  
なり ●又全社の内に一ツの婦人會を組織し知事及び

鎮臺司令官裁判長病院長師範學校中學校々長其他紳士の  
細君を始め二百有餘名の會員おて看護法傳習及び修身教  
育等毎月十日を以て集會定日とし進徳教校役員因果ハ理  
を説明あり悉次佛法ハ眞理ニ至り進て易行他力ヲ轉入し  
慈母ニ育せらる、お至りの旨趣など是則ち我宗弘興ハ弟  
一義と深く歡ひけり然るおか、る美譽を外見えて宗は繁  
昌と見做し浮薄信者の睡眠ニ安どるおろせありをハ報お  
り ●廣嶋私立學校へ顯道學生小林宗太郎と英學教授  
の爲め招かせしか此節改正ハ見込おふおや顯道校ハ規則  
等ハ問合せありたり ●備後より出雲へ交通の車道開  
鑿の工事と殆ど落成せりと ●又備後國世羅郡加茂の  
私立明治教校へも洋學の科を加へたりと京丸山よりハ報  
知 ●石州益田を講本とし進徳講と稱し國內おて殆ど  
七千人の講習おて眞宗の杖と遵守し報恩の一分ニ備へん  
と近年頻りに盡せしとの目的おふきよア講中若慮一方  
ならずりしも今般一戸毎ニ桑苗十株と植付養蠶の業を興  
し宗教上の入費お充てる計畫おて本年春蠶ハ山桑等と以  
て飼ひ立て追々上州江州より教師を聘せんと奔走中なり

と ●因幡國本派鳥取説教所へ高城説教所ハ出張ありて  
より疎く無宗教同様不振起れ土地柄も定日説教ハ滿場の  
恭詣あり五月十一十二兩日淨土宗一行寺へて演説開會お  
り本宗淨土寺副住職片上某魚町は高橋由藏氏等の演説お  
りて終り高城氏ノ演説おて其大意ハ邪蘇ト佛教ノ得益な  
り頗る贊成ありて喝采場に溢れ聽者感嘆満面顯シヨリ  
大ハ宗教乃体面改改たりと ●但馬國城崎郡立野村  
ハ一村學と法義深厚ハ相續せしハ又豐岡裁判所へ出勤  
の人より承りしに其人趣任以來該村ハ係裁判件一点もな  
く不審おて警察を檢するハ違犯の廉更ハなまこを全く宗  
教と奉じる功ありと語らせしか果てて今回本山ハ護持會  
ハ設けありて節儉と本とすへさ旨趣ハ基ハ一村の婦人皆  
束髪となり首上銚と品を買却し多額の金を得捨したりと  
●丹波國へも一年をを試植おしに過分の収獲あるよし冬  
季に陪植するより十二月或ハ一月ニ至りて植付決して遅  
ららんとせよ一ツハ其作なりさをも陸中の岩手よりの  
報によれハ本月十五日ニ梅花散り櫻花漸く開くと云ふ  
し季候一同ならされハ土地もともるあらん ●攝津ハ



尼ヶ崎小太宗の末寺四ヶ寺ありしは當時の世上て徒らふ傍觀座視すへきふゆらさるとして私立學校を設け英學數學簿記法杯を壯年小練習せし先逐次宗教を授けんとて去月顯道校の學生宇治秀平をも招かれ本城堅宏氏等も臨まを演説もあり戸長等臨席ありて盛なふ開業式舉行ありたりと

●攝津國島上郡東五百住村常見寺に設けられたる崇徳會の餘程規則も細密ありて毎月第一日曜日と會同として條規も送られたれども今向は餘白なけり後同小職をへし

●五月廿一日は宗祖大師の降誕日なごの大教校普通教校をも賀式と行われたり其概容を記せ之大教校は豫て用意ありしふや數千の紅提灯に校の徽章を点し講堂の正面より南北の寮舎に亘し其中心より鐵門まで左右二行に分ち其狀大の字を爲す國旗は鐵門ふ又し提灯交又順きて挑美麗々を尽せり

●又普通教校は全校體操練習所ありて大樹ありて中央より南面して數旋の大旗に奉祝高祖之降誕と云ふ七字を大書し天をも衝くへき長竿をもて空中に懸へし又大樹より左右細繩を曳り球燈に替ゆるふ帽と以てせしは奇巧と云へし又樹根より

西北二方より高札を置き數万の洋本を以て屏は様をなふ其前小種々の造り物を陣列し東方に堂々たる高檯を設け水田子に柄杓と添へて水瓶水香ふ代し又重體操階段の瓶小諸種の花木ヲ挿し銃を組みて三方へ圍繞し四方ノ塙ふは一紙に奉燈ノ二字を書したる杖幾百となく帖附あり猶八方に種々乃見せ物を設く就中入口左邊に旗持人形及び五大州鳥類大博覽會の仕組は炭どり塵どり草どり等ノ類を集めて形容せり趣向實小巧みなりと云ぬへし其外掛茶屋射的等の風景も作者の意を用ひらしものと見受けざりさて定刻に至れり幹事里見氏職員及賓客は講氏の正面左の方に列して見物ならる其式左れりとし

喇叭 音樂 英文及和漢文 演説 英語二人獨乙語 日本語二人部ヲ外國語 等ニテ五六名 一人朝鮮語一人ニハ譯者一人宛ツエリ 南瓜躍 二和加 射的 手品 獨樂 踏舞 何を奇小して且ツ巧き上來ハ午前小履行あり午後亦出場前の如し 落し斷 二和加 手品 角力 翠て休憩し夫より 擊劍 一足籠 三足籠走 軍歌 渦巻走とて解場なり殊に當日は天氣晴朗にして參觀は崩るゝ如き乃大群集何をも愉快娛樂と極りた

●五月十六日より廿日まで顯道學校今期の臨時小試験を行ひ翌廿一日は宗祖大師の降誕日を祝する微志にて廿日に引上げ午後より演説を催したるに聽衆は頗る多のりし其概容ハ式の如く演壇を設けて

大日本策及五月十三日ノ東京日々新聞ヲ讀ム 桃木民藏 象家利合ノ説

松浦僧梁 善惡ノ標準 一二三盡 演 解

第一義論 本莊堅宏 万法唯心ノ説 嶋地點雷の諸氏なり聽衆一同感動れ色を顯はせり殊に検査の後なきハ教員も皆聽衆席にありしか皆て宗教に指染せざる學士得業士も阪向ノ念を生せられ解壇後教員へ酒肴と登し試験の勞を慰せられし時教員ヨリ爾後の續て來聽を乞ひせしもあり且同席にて理事是山氏より定日の演説ハ教員中より一兩名順次交番して各自の學術を演せられた後由を請わせし何れも承諾ありたりと

●五月廿一日祖師降誕奉賀ハあらねや顯道校ハ豫て習練ありて兵式行軍ため午前七時より喇叭手先導者各生徒を三小隊ニ編制し司令官等の指揮に従ひ前營中軍後營の仮帳を

成し大谷本廟へ參詣せしは勇ましかりしありさまにて市中の人と店前ニ駐け出て往來する人は路邊にイみ恰也神社御幸乃見物人ハ等しかりと

●五月七日東京本挽町厚生館ニ於て日本全國にて新教プロテスタント派ハ宗徒ハ百名ニ付一名の惣代人を出し全宗維持併傳道方ヲ議せりと右プロテスタント派ハ一致セマンホードヲヤナヲ組合ハフテメリススト監督長老獨立グリスタヤナノ九派にて全國教會場百八十六ヶ所主任傳道者七百四十一人教會員ハ男七千三百三十三人女四千九百八十三人小兒千六百八十二人十九年中入會者三千六百五十五人にて總計一万四千二百六十三人那蘇學校二百三十七ヶ所ハ生徒九千二百四十七人又十一日中外電報ハ全教徒ハ總代人諸氏ハ今三日より六日迄本挽町厚生館ニ於て會議を開き種々協議を遂ぐるよまなるか其議題中ハ全國全教徒の連名を以てハイムルヲ 聖上皇太后陛下奉呈するハ男女ハ一夫一婦たるへきを皇室ハ建白すれと等の頂もあり又我國にて信徒の最も多きハ一教教會と組合教會の二ツなれり此を合併せんと議するなり七日中外電報ハ



見も彼の外教今日の盛大猶然り嗚呼我佛徒の知らず如何なれ感情とあすや ●六月二日の例の如く御對面所於て 御直諭在らせられ續て鶴地巡教師の披露あてて御直諭は旨趣得と拜聴あくしての寶の山入りて手を空しくして版らんの御たごへの如くなり光陰の移り易き昨日今日と過死ゆくあき一日も片時も急て往生の一大事を聽得へし近日御東上乃御留守とも直俗二諦の宗風を衛り信心正因稱名報恩の一を守り世の文明と共に進て治世は補益とならずならんと世は世よつた法義も誤ラサレ様よとの議吳く御取次ありたり ●全十六日は御對面所にく御眞諭寫し拜讀ありたり ●島地巡教師の去る八日歸途に就かき東京におひて法主殿の待受々せらるゝと ●利井教師も十日午後下神全所より御供にて東上ありたり閃かに聞くに全氏の七月上旬に歸京との噂あり ●法主殿には去る十一日御東上遊のされ午前六時御出門にて車停所より蒸車御下神氣船に召換らる風波穩か定刻横濱へ着港直に新橋への乗車夫より築地へ御着院あらせられたり ●廣嶋進徳教に於く有志伴侶は集會ありて

説教改良の議題に就き討論の熱議しよりとなきは好結果を見る近きあるへし ●外教の益隆盛にして信徒の増加するも尋常學校教科書にナホラ外教の見ゆるに よるならんか ●赤松巡教師の六月上旬より下廣地ノ町専勝寺にて十一日より十六日まで説教あり近年稀なる聽象にきて立錫の地なまは廣島より乃報 ●本會乃松田甚左衛門氏は學生松浦忠太郎氏を相伴ひ近江美濃伊勢の三國へ客月廿日出張し今に巡回中なり去り來七月上旬にて歸京の豫定なり ●本願寺境内と唱ふる醒々井御前通上ノ堀田某ぬしい豫く法義爲信の人あしていま女子教育の急務あるを感し門前町に空坊を買ひ求めこまか學會所を爲し賛成者十名と共に發起し共に相議し淨財を投ち來る七月一日と創めとし業をひらさうの科其業につき良教師を依頼し殊に婦人は裁縫の専らなればとて男女洋服裁縫にまゝつゝへなき本業の職工に托し和服の女學校の業と終へし教師を聘ちこれの手業を授け眞家の本分を守らしめ信徒乃本分を尽す計畫ありと其學會廣告ハ左に記しぬ

●同盟社設立女學會廣告

緒言

●明治十有四年我輩眞宗信徒相議し一ノ講社ヲ設ケ稱ノ同盟ト云ヒ相導ヒテ眞俗ノ教義ヲ實踐スルコトヲ約ス且我輩信徒ノ當ニ尽スヘキ愛國護法ノ務資ニ充ントテ若干ノ淨財ヲ募集シ時ニ隨ヒ機ニ會シテ相當ノ事ニ從ヒ勉テ素志ノ貫徹セシコトヲ計リニキ輒近人皆教育ノ急要ナルヲ説キ我眞宗教内ニモ此事已ニ緒ニ就キ殊ニ六條舊境内ニハ古來未曾有ノ盛事ヲ今日ニ見聞スルヲ得テ我輩信徒ノ日夜同慶スル所ナリ然リ而シテ獨リ女子教育ノ事ハ已ニ輿論ノ傾向スルニモ關セズ猶其舉行アルヲ聞カス憾タル亦甚シ我輩信徒ハコノ最急最要ナル事業ヲ放任スルニ忍ヒス依テ財資ノ微弱ヲ顧ミス敢テ事此ニ從ハントス蓋シ事頗ル重大ニ屬シ施行固ヨリ容易ナラス故ニ先社財ヲ傾ケ今コノ會ヲ創立シ稱シテ願承女學會トス而後隨時ニ募金シテ徐ニ之ヲ擴張ナ期セントス是教義實踐ノ餘光愛國護法ノ一端ナラン若夫女子教育緊要ハ讀者自了ス又贊スルヲ要セス偏ニ冀フ同感ノ信徒諸氏及良姉妹諸君ヲ贊助

●就テ入會アラフコト

科 目

- 修身 讀書 算術 作文 習字 英語
- 和裁縫 編物 家政 唱歌

概 則

會員ハ女子ニ限ルモノトス○修習科目ハ會員ノ自撰ニ任ス○時ニ試業ヲナシテ習熟ノ科ハ熟達ノ保証狀ヲ授ク○入會ノ節登壇限入會式トシテ金五拾錢ヲ收ムヘシ○毎月會費英語科ハ金貳拾錢○洋服裁縫ハ金五拾錢○其餘科目ハ多少ヲ不問金三拾錢トシ其月五日迄ニ之ヲ收メム○寄宿ヲ許ス食料ハ隨時ニ之ヲ定ム○入會ヲ望ムモノハ來談スヘシ

京都下京區第廿三組本願寺門前町拾壹番戶  
明治廿年七月一日開會 願承女學會

○寄 書

●曩ニ松浦君ノ願進學校有志ノ不精神ヲ訓誡セラレタル



ガ今將ニ德義上ノ精神ヨリ成立セシ相續會ノ事務所ヲ同  
校内ニ置クニ至リ果シ君ノ鞭策顯然タリト其文左ニ摘  
録ス

●顯道學校ノ有志者ニ示ス 松浦 僧樂

凡ソ天下ノ事物一因ヨリ現出スル者ナシ衆縁和合シテ現  
出スルハ世界固有ノ眞理ニシテ理論ニ質シ實際ニ驗スル  
ニ其理極成シテ智者ノ疑ヲ容レザル所ナリ然ルニ世ノ愚  
闖ナル者或ハ天帝ノ一因ヨリ世界万物ヲ造ルヲト忘想ノ  
說ヲナスコトヲ聞者ノ取ラザル所ナラハ今新ニ弁スルヲ待  
ミザルナリ其衆縁和合シテ現出スルノ甚ダ明著ナルハ顯  
道學校是レナリ始メ弘敷講ノ有志二三ノ發起ヨリ講内ノ  
父兄ヲ勸誘シ其子弟ヲシテ學ニ就カシメ以テ宗教ノ思想  
ヲ培養セントスルコト續々有志ノ賛成ヲ得テ終ニ巍然ナル  
學校ヲ創立シ學生日ニ月ニ増加シ此盛大ニ至ル者何ゾ一  
因ヨリ現出スルモノナラザラヤ然レニ世上ノ困難年々甚  
ク頻リニ下民ノ衰頹ヲ來タセシヨリ我ガ佛教ニ影響ヲ及  
ボシ無上ノ宗教モ終ニ世上ノ困難ト共ニ傾覆セントスル  
ニ至ル傳燈ノ大法主深ク此ニ憂慮シ玉ヒ新ニ護持會ヲ設

ク有志ノ僧俗ヲシテ我宗教ヲ護持セシメントシ給フ愛以  
テ各々丹誠ヲ抽ンテ此會ニ喜捨スルモノ實ニ膏血ノ餘滴  
ト云フベシ此時ニ當リテ本校ノ有志者更ニ一層ノ膏血ヲ  
絞ルコト非レバ此校ヲ維持スル能ハズ予思フテ此ニ至レバ  
涕泣スルノ一言ノ發ス可キ者ナシ然レハ退ク者フレハ  
有志諸氏此校維持ノ本旨ニ於テ未ダ誤リナシト云フ可  
ク何トナレバ諸氏ノ思想ヲ熟思スルニ今時外敵ノ勢力學  
校ニ敵場ニ陸盛ナラントスル者ハ彼ノ傳道社ヨリ資金ヲ  
送還スルニ基シ佛教ノ衰頹ハ資金ノ乏シキニ因リ布教者  
ハ謝金ヲ貧リ勉學者ハ學資ヲ募リ其他教校モ資金  
ノ不充分ヨリ萎靡トシテ振起セズト認可シ此校維持ノ方  
法ハ資金ニ注目スルノ外ナク終ニ我ガ佛教ノ盛衰モ資金  
ノ多寡ニ訴ヘントスルガ如シ若シ果シテ爾ヲ誤ノ甚レ  
キ者ト云フ可ク今試ニ政治ト宗教ノ關係ヲ辨シテ其誤ヲ  
知ラシム夫レ宗教ト政事トハ異ニシテ分ツベカラズ一ニ  
シテ同スベカラズ何トナレハ一物ノ兩端ナリ政事ハ國家  
ヲ治メント欲シテ身心ニ及サントス宗教ハ安心立命ヲ基  
本トシ以テ國家ヲ治ムルニ至ル故ニ政事ト宗教ハ一物ノ

兩端ニシテ政治ヲ本トセバ宗教ハ末トナリ宗教ヲ本トセ

バ政事ハ末トナル此本末具足セズシテ天下人心ヲ治ムル  
ノ理アルコトナシ如此一物ノ本末ニ於テ懸ヨリ細ニ達ス  
ルハ政事ヨリ宗教ニ及フ者也綱ヨリ蠶ニ達スルハ宗教ヨ  
リ政事ニ及ノ者ナリ其懸細ハ重々ナリト雖也之ヲ大ニ分  
ツ時ハ有形ヨリ治ムルヲ政事トシ無形ヨリ治ムルヲ宗教  
トスルナリ此ノ有形ヨリ治ムルハ金錢ヲ以テス可シ財用  
ナクシテ國家人民ヲ治ムルノ理ナシ是レ衣食足リテ教ヲ  
興ス者ナリ又其ノ無形ヨリ治ムルノ法ハ金錢ヲ以テス可  
ク若シ金錢ヲ以テ無形ナル者ヲ治メントスレバ醉ヲ醒  
サントシテ酒ヲ勸ムルガ如ク永ク結果ヲ見ルノ日アルコ  
トナシ是レ其ノ誤リトスル所以ナリ然レバ何ヲ以テ宗教  
維持ノ基本トスベキヤト云フニ無形ヲ本トスル宗教ナレ  
バ宜ク無形ヲモテ維持ノ基本トス可シ其無形トハ諸氏ノ  
精神ニシテナリ精神一タビ到リテ何事カナラザラン若シ有  
志諸氏ニ於テ一タビ精神ヲ起サズ必ス之ヲ子弟ニ移シ以  
テ宗教ノ精神ヲ養成スヘシ外敵ノ勢力ヲ恐ル、勿レ佛教  
ノ衰頹ヲ憂フル勿レ本校ノ學生ヲシテ宗教ノ丹誠ヲ培養

セントスルノ精神アラバ予モ亦其精神未ダ曾テ一日モ廢

弛セズ故ニ諸氏ノ精神ト合シテモラ學生ノ精神ヲ培養セ  
バ學生モ亦此レニ合セサルハ非ズ此三ノ精神ヲ和合セシ  
ムル時ハ天地ヲ貫クノ勢力ヲ成スルハ他日ヲ待タズシテ  
今日ニ在リ他方ニ索メズシテ此校ニ在リ若シ其ノ有形ノ  
事業ニ至テハ一時ノ成功ハ望ム可クシテ行フ可ク只精  
神ヲ立ツルハ掌ヲ反スヨリ速也何ノ難キカ之レ有ラン若  
シ其ノ精神ヲ起スヲ難トスル者ハ是レ自暴自棄ト謂フ可  
ク自暴自棄ニシテ幾万ノ金錢ヲ抛クトモ宗教ニ成功ヲ見  
ル能ハサルハ予ガ諸氏ニ對シテ保證スル所ナリ噫有志諸  
氏以テ如何トナス若シ各自ニ能ク其精神ヲ立ツル時ハ即  
チ衆縁和合ヨリ成スルモノニシテ他ヨリ之ヲ破ルコト能  
ハザルハ決シテ予ガ臆説ニ非スシテ世界固有ノ眞理ヨリ  
論スルモノナリ且ツ夫レ本校組織タルハ學士ヲ養成スル  
ノ本旨ニ非ラズ農商ノ事業ニ就テ教授スル者ナレバ其學  
科ハ是レ宗教ノ枝末ニシテ政事上ノ事業ナリ然レハ此教  
ニ幾万ノ金錢ヲ抛ツトモ唯是枝末ヲ養フノミコシテ根本  
ノ宗教ヲ養フニ非ラザルナリ而シテ予ハニ宗教ヲ培養セ



ントスル者ナリ有志者若シ同心アノハ早ク宗教ノ精神ヲ本校ノ學生ニ深遺セヨ

副伸空論ヲ避ケテ實業ヲ導マハ古今ノ常則ナリ然ルニ世人誤リテ有形ノ業ヲ實用トシ無形ノ業ハ空論ト思フモノアリ惑ヘルニ甚キモノナリ予更ニ實用論ヲ草シテ此篇ノ註解ニ備ントス

●本宗有志ノ信徒ニ請ス 馬遊生

凡ソ社會ハ活物ニシテ死物ニアラズ何トナレハ活人ノ相依テ作セル一大集合物ナレハナリ果シテ然ラハ活物社會ニハ必ズ爲スアルノ活人ナカレ可カラズ爲スアルノ活人アリトセバ之ガ爲ニ活手段ヲ設ケ活用器ヲ供セサルベカラズ  
試ニ見ヨ方今我政府ハ海軍擴張ノ事ヲ務メ所得税法ヲ設ケ以テ之カ費ニ當ント圖リ尙ホ財産餘裕アルノ民ニシテ該費ニ供セント欲スルモノハ許可セラル、旨ヲ向キニ鹿鳴館ニ於テ大臣伊藤伯ハ聖意ノアル所ヲ演說セラレ其趣意ノ如キハ各地方ノ新聞ニ掲載アレハ今余カ贊スルニ及

ハサレハ是亦活動手段ノ事ナルヲ知ルベシ  
今我同胞ノ諸君宜シク活眼ヲ開テ我佛教社會ヲ觀想セヨ  
果シテ現今ハ如何ナル秋カ余正ニ鳴號シテ有力者ニ告ケント欲ス我佛教回復ノ時至レリト然ルニ他ノ論者或ハ言ハン外教ノ勢ヒ恰モ旭日ノ昇ルカ如ク既ニ十九年中「プロテスタント」ニ入會セシモノハ三十六百五拾五人ノ多キニ至レリ況ンヤ天下ノ論士舉テ曰佛敎ハ救フ能ハズト天下ノ伊侶舉テ曰我敎亡フ矣ト子獨リ何ア此ノ如キ怪言ヲナスヤト余コレニ對テ曰ハソ何ノ怪カコレアソノ余ハ外敎ニ勢力アルヲ羨ムモノヲ怪トス何トナレバ彼ノ敎ハ事實ヲ驗シ理論ヲ究メ學術ニ質スニ一トシテ符合スルモノナシ故ニ彼ノ敎ノ讀者ハ尙ホ歸着ノ途ニ迷フ先キニ耶穌「ユニテリアン」派ノ敎ハ宇宙無類ニシテ彼ノ敎派カ天下ニ宣言セシ敎義ナリト云フ十四條ヲ草シ本年五月七日ニ九日迄ノ郵便報知新聞ニ掲ケテ以テ其解釋ヲ附セリ若シ夫レ彼ノ條目ヲ以テ彼レガ眞面目ナリトセバイエ、ノ讀者ノ版着ヲ失スルモノナリ何トナレハ普通耶穌敎ニ從來眞理トシテ談スル所ノ宗義ニ於テ變更スルモノ多シ是

レ從來ノ眞理ハ識者ノ信セサル所ナルカ故ニ一變シテモテ識者ノ情ニ應セントス余ハコレ抱腹ニ堪ヘズ夫レ眞理ハ万古不易ノ常道ナリ私情ヲ以テ左右スヘキモノニ非ズ若私情ヲ以テ變更スヘキモノナレバ焉ア吾人ノ生靈ヲ托シ吾人ノ尊敬ス可キモノナランヤ

故ニ眞理ハ世界ノ眞理ニシテ人類ノ眞理ニアラス眞理ハ古今ノ常道ニシテ人類ノ能ク左右スヘキモノニ非ス

其托スヘカヲザルモノニ托スルヲ狂人トシ其托スヘカヲザルヲ知テ未ダ版着スル所ヲ知ラサルヲ迷者トス其狂人ヲシテ正人トシ迷者ヲシテ開悟セシムルヲ覺者ノ敎トス即チ佛敎ナリ而シテ文明日々ニ進歩シ智識月々ニ發達スルヲモテ人皆其理ヲ求メ生靈ヲ愛スルノ活眼ヲ開クニ至レバ必ズ彼ガ如キ始息ノ敎ヲ用ヒズシテ古今ノ常道ニ托シ固有ノ眞理ニ版着スヘシ故ニ佛敎回復ノ時至レリト云何ツ怪言ナランヤ其固有ノ眞理ニ版着シ古今ノ常道ニ托スル者ヲ各クテ爲ス有ルノ活人ト云ナリ此活人ニシテ活手段ヲ設ルノ第一點ハ團結力ニ過タルハナシ故ニ今回國家ノ衰頹ヲ回復シ佛敎ヲ擴張セン爲メ信後相續會設置リ

美譽アリ若活人ニシテ活用ヲナサ、レバ木偶人ト何ア擇ハン然レハ將ニ爲ス有ラントスルノ活人ハ速ニ入會シテ活用器トナルベシ徒ラニ躊躇シテ死物ト隊伍ヲナスハ余ニ於テ取テザル處ナリ諸君モテ如何トス

鳥取共和會員

俗諺ニ曰ク燈臺元ト暗シト此言ヤ以テ方今我宗教社會ノ弊習ヲ矯正スルニ足ルナリ今世人稍モスレハ則チ曰ク僧侶ノ迷夢未ダ覺メサルヲ如何セノ信徒ノ頑固未ダ去ラサルヲ如何セント或ハ演說ニ或ニ新聞ニ喋々論スト雖モ常ニ怪シム其演說ニ昇ル人其筆ヲ執ル人各自ニ之ヲ實着ニ行ヒ世人ノ率先セザルヲ是レ彼ノ熟眠頑固ノ愚民ガ法城累卵ヲ耳ニセズ唯堂塔ノ宏莊ト法服ノ紫朱トニ注目シ宗教繁昌ト心得タルモノ比スルニ所謂五十歩百歩ノモコテ未ダ格別ノ相違ヲ見ス勸章ニモ同心懺悔シテ人ノ耳ニ聞カシムルハ自信敎人信ノ道理ニ相應ストアリテ他人ノ頑眠ヲ覺サント欲セハ宜シク自分ニ實踐躬行シ象人ノ模範ヲラサルベカラサルナリ今回有志諸氏ノ協力ヲ以テ相續會ヲ設立シ換展誌ヲ起シ國々ノ景況ヲ通報シ宗利國益ニ



備ソト聞ク所謂言行忠信表裏相應ノ佛説ニ專ラ注意セザル、モノ、如シ豈ニ千歳ノ美譽ト言ハサルヲ得ンヤ凡ソ百般ノ事業浮薄ニ出テ他人ヲ激スルニ止リ已レ之ヲ行セサルモノハ百万方之ヲ勤ルモ人我ヲ顧ミス勞シテ功ナキノミ然リ而テ宗教ノ衰頹ヲ挽回スルハ他ニ非ス一度他力ノ本願ヲ聞持スレハ眞俗二諦ノ教義ヲ全シ自カラ其業ニ勵ミ怠ラザル是即チ報恩ナリ謝徳ナリ報恩謝徳豈ニ別ニ奇異ナルモノナランヤ是レ即チ相續會ノ相續會タル所以ニシテ之ヲ除キ相續會タル所以ノモノアルヘカラス嗚呼相續會ハ一大美譽ト云フヘシ是ニ於テ深ニ望ム所アリ聊カ記シ以テ有志ニ謝ス

こたひ相續會のもふなりしを聞て日をも年をも相つゝくらむといひ侍と帝  
たひかさね見るもさゝきも飽足らし

心む相續の志あるふみ

今ま世に軍歌の行むる、市は遊ぶ幼童も野に戯るゝ  
兒女も口くせの如まといへども之を全く軍人の銳氣

活動歌増進する其文ふれば已の職に準し業に就き之を唄ひ之を唱へなは幾分補益ありなんと茲に正信偈の大意を綴り本校生徒の運動會或ハ行軍に際し軍歌に代用するものとす

顯道學校學生山陰寒士古城

● 行進歌

法藏因位乃そのひかし  
因行國土を見送るよし  
されのちかひと發せし光  
とりのへたまひる名号を  
十二けひかりを放たしめ  
十七願乃正業と  
覺ぞのひらけ浄土への  
この世かた世の利益など  
死なぬ御國にいたるまで

あまたの佛々のうの中の  
殊小勝れ志願をたて  
なかたあいの思案ふて  
あま結く弘む誓ひあり  
れこる限あくかゝやあし  
十八願の正因て  
必とうまほことを得る  
進めやすめもろとも  
身粉にふる共進むへし

佛のこの世ふられ出て  
五濁のわれらかもろ水も

彌陀の誓ひをどきひろめ  
一念信喜のこころとき

海にふかれの入ることく  
あさの曇りはありなから  
信の獲られし身けうへは  
釋迦のとろこひこの人を  
僞慢邪見のひとくは  
戒めたまへることなれと  
死なぬ御國にいたるまで

おる之潮の味となる  
旭のほきりやみ晴るゝ  
惡趣の果報を横に截る  
分陀利華とろあつたたり  
信樂待たまどわたりすと  
進めやすめもろとも  
身粉にふる共進むへし

○

印度震旦日れば本に  
彌陀の誓ひのたゝひどの  
初地乃さとりを開きつゝ  
弘光て浄土城ねかふるを  
果きて五百れとしと經て  
陸路と船路のみちおまへ  
たゝちに定聚陸敷おいる  
はど々の恵みを報ひよと  
死なぬ御國にいたるまで

つたへたまへる高僧も  
龍樹菩薩は世よいてゝ  
邪見をくゞして正法を  
釋迦の楞伽にときたもふ  
萬つの御法をふたつせし  
彌陀の誓ひをたもつとさ  
はねに念佛おまたらば  
進めやすめもろとも  
身粉にふる共進むへし

天親菩薩の佛滅後

一部は論とありししく  
無尋光如来に歸命あて  
往相回向によりたまひ  
よろす乃衆生とことごとく  
法性真如をささるゆへ  
園林遊戯と世に出てゝ  
まきや還相回向あり  
死なぬ御國にいたるまで

九百餘年に世にいてゝ  
三部は經意演へたまひ  
横超弘願光闡し  
他力に一心あらせり  
寶らの海に歸せしめく  
菩薩聖衆のうつに入り  
神通自在に化益をる  
進めやすめもろとも  
身粉にふる共進むへし

○

曇鸞大師を梁帝は  
仙術ならんかへるとき  
觀經一部をうけたまひ  
忽ち他力の門にいり  
報土の因果とのへたまふ  
正定の因の信ひとつ  
あらゆる有情を化益すゑ  
死なぬ御國にいたるまで

常に菩薩とはいしかり  
途中て三藏流支に逢ひ  
仙經十卷やさすてゝ  
論註一部をあわわして  
往還回向の佛力よ  
生死と涅槃とさとりへく  
進めやすめもろとも  
身粉にふる共進むへし







道禪初死は涅槃宗

自のう他力に皈したまひ  
 浄土の一門れみありて  
 三信三部をねむころに  
 像法末法滅乃  
 一生惡惡の身たりども  
 无上れ妙果を證るかり  
 死なぬ御國にいたるまで

○  
 善導大師のまどさうに  
 定散逆惡みあどもに  
 光明無量をふんとして  
 名号の因とさくどきに  
 因縁和合をあらわして  
 金剛堅固の信心か  
 章提と等しく三忍の  
 未來の法性常樂よ

○ 慧師の石碑の文を見

聖道万行及のまほ  
 易く入ふへきみちとせさ  
 はじめいままめ憂おもて  
 衆生を導いたまひたり  
 彌陀の弘誓に値ぬれば  
 進めやはじめもろどもに  
 身は粉になる共進むへま

○  
 ほとけの正意を顯して  
 あわせみたまむる心から  
 宿善成熟するゆへに  
 光明またこれ攝取る  
 本願智海に歸入する  
 一念慶喜と定まれ  
 利益の此世にあふうちに  
 進めやすうめもろどもに

死なぬ御國にいたるまで

○  
 源信和尙の一代の  
 遍へに浄土に歸しよまひ  
 専修を難修のどくしげを  
 きりめておもき悪人の  
 ひたすら佛名稱えてそ  
 攝取のひかりの中にある  
 攝取の光明見させども  
 何れお我身とてらすかり  
 死なぬ御國にいたるまで

○  
 源空大師は本地をこ  
 智恵第一と世によいせ  
 善惡ん愚をわれみて  
 普々ひろ然ためよとく  
 弘願の念佛かしへたり  
 疑ひひとつかさわりあり

身粉にふる共進むへし

○  
 佛教のまほくひらさくそ  
 西方往生せうめしむ  
 報土と化土とに分たまふ  
 外の方便さらになし  
 浄土に生るゝ身となれ  
 煩惱に眼さへられて  
 大悲ものうさことなくて  
 進めやすうめもろども  
 身粉なる共進むへし

○  
 彌陀カ勢至カ善導カ  
 佛の教にのきらか  
 浄土のみのを我國よ  
 撰集をあらわして  
 生死の輪轉すること  
 涅槃の都こに入ること

信心ひとつとす、めまむ  
 死なぬ御國にいたるまで  
 進めやすうめもろども  
 身粉なる共進むへし

○  
 天竺震旦我國か  
 かわるゝに經と説き  
 濁惡無邊の衆生とは  
 教へあまひるみれりなり  
 つゝへたまへる高僧の  
 かゝる教へのなかりせば  
 出たりこのさへ佛のかん  
 稱名念佛もろとも

○  
 菩薩ヤ大師カ出たまひ  
 論を釋して相つたへ  
 憫みすくせんためにとく  
 道俗とも手をとりにて  
 教へを信するはかりなり  
 いうて苦界をまぬかむ  
 海よりふかきと祖師の恩  
 常にお御かんを報すへし

石見國美濃郡木部村 野村 萬平  
 攝津國大阪本町四丁目 福田 正三郎  
 右ハ本會ニ入會ノ申込アリタリ

正 誤

相續會規約裏面ノ石見國美濃郡益田本郷鐵野ハ釜野ナリ  
 全國鹿足部津和野中座村中川善助ハ傳助ナリ  
 攝津國神戸區阪町三丁目ハ榮町ナリ

●寄附金人名  
 一金壹圓 田中 庄平

金壹圓	栗田 長三郎
金壹圓	佐野 熊一
金壹圓	龜田 兵三郎
金壹圓	島田 徳三郎
金壹圓	神尾 清右衛門
金壹圓	柏口 清右衛門
金壹圓	谷野 近七
金壹圓	増野 半七
金壹圓	村野 三郎
金壹圓	志水 仁三郎
金壹圓	田井 又右衛門
金壹圓	藤井 三郎
金壹圓	伊藤 又三郎
金壹圓	千代 一助
金壹圓	内藤 源一
金壹圓	鹽谷 昇一
金壹圓	藤井 勝一
金壹圓	水野 銀吉
金壹圓	齊藤 吉

明治廿年六月十日 出版御届  
 同年六月三十日 刻成御免  
 鳥取縣士族

編輯人 中山 政良  
 因幡國邑美郡敷原町  
 五百八十一番地  
 出版人 京都府平民 布部 常七  
 下京區第廿五組花屋町  
 八番戸

發行所 相續會仮事務所  
 京都府下々京區  
 油小路花屋町上ル西若松町三十五番戸



